

四季彩便り

2015・晩夏

発行人
光が丘 4-11-2
漢方四季彩堂
酒見 裕子
(092)927-2693



自立

涼を求めて木陰に足を踏み入れると、頭上からホトトギスの声が迎えてくれました。ときに夜中にも聞こえる囀りが夏という季節を実感させてくれます。

先日、店先に巣立ちしたばかりのスズメが訪れました。

幼い羽毛は茶色というより淡い灰色の印象。嘴の端にまだ黄色が残っています。飛び方もあまり上手ではないけれど、一生懸命羽をはばたかせながら軒先のクモをくわえて飛び去りました。

「頑張れ！」と心の中で応援しながら、ふと自分の子と孫に重ねてみました。

人間と野生の生き物とでは比べようがないかもしれませんが、あの幼いスズメの自力で餌を捕る逞しさと、巣立ちを促した親スズメの厳しい愛に想いを馳せるとき、それが彼らの宿命だとしても、そこに深い学びを得るのです。

「孫を甘やかすばかりじゃいかん！」と自分を厳しく戒めるべきことでした。

われと来て遊べや親のない雀

小林一茶



※俳句では雀は春の季語とのことです。

四季の話題

昨年の夏は七十年ぶりに国内で

デング熱の患者が発生し、公園が閉鎖されたニュースは記憶に新しいところですが、今年もまたそんな季節がやってきました。

韓国ではMERS(中東呼吸器症候群)が流行し、対岸の火事では済まされなくなってきました。

つい先ごろMERS抗体をダチョウの卵を利用して大量に精製する技術が国内の研究グループによって開発されたとの情報が流れました。

この抗体をマスクやドアノブなどにスプレーするとウイルスをマスキング(覆う)し感染防止が期待できるのだそうです。

これは五年ほど前に新型インフルエンザが流行した際に注目された抗体入りマスクと同様の考え方で、今後エボラ出血熱の感染防止への応用も期待されます。

これらの感染症はすべてウイルスによるもので、冒頭のデング熱はヒトスジシマカというやぶ蚊が、そしてSFTS(重症熱性血小板減少症候群)はマダニの仲間が媒介する、ごく身近な感染症です。

中国ではSARS(重症急性呼吸器症候群)流行時に人々が感染防止に利用したのが菘藍という薬草で、抗ウイルス作用に優れた生薬として広く認められています。

日本ではそのエキスを飲みやすくしたハーブティがあります。



折々の薬草

ネジバナ

夏至を迎え、これから昼が少しずつ

短くなっていく頃、野に出てみると、田んぼの土手にピンク色の花が林立しているのが目に入りました。まっすぐ伸びた細い茎に小さく可憐な花がらせん状に咲くようすからネジバナの名がついたのでしょう。別名の振摺(モジズリ)とは、ねじれ模様にした絹織物のことで、ねじれた花序をこれに例えたのだとか。

小さい花ながらよく見るとちゃんとランの花の形をしています。らせん状に花がつくのは、か細い茎が倒れないようにパラランスをとっているのですね。

さらに一つ一つの花が横向きに開いているのは、花粉の運び役となるハナバチが止まりやすいように、そしてハナバチが花に頭を突っ込んで蜜を吸ったあと、出るときにこすれてその頭に花粉の塊がくっつく仕組みです。そうやってハナバチに受粉の手助けをさせるのです。

薬用には新鮮な全草を煎じて咳止めに、また腫れものには根をすり潰して患部につけます。

こんな可憐な花をすり潰すとは何だか心が痛みますね。ラン科の植物はネジバナも含め、発芽するには地中に棲むラン菌の助けが必要です。ランの種子は地中のラン菌を引き寄せ、種子の周囲に感染させることによってラン菌から栄養を吸収し、やがて発芽して自力で光合成ができるようになるまでに育つとなんとラン菌を分解してすべて自分の養分にしてしまうのだそうです。

見た目はか弱いネジバナですが、ハナバチやラン菌を利用する逞しさには舌を巻くばかりです。

みちのくの しのぶもじずり誰ゆえに

乱れおと思ふ 我ならなくに

古今集 河原左大臣

